

竹本座に革命の旗揚

敵は師匠、悲痛の競争

貞享元年二月

いよいよ新派浄瑠璃義太夫節樹立の日が来た。舊風打破、革命一發の烽火は、泰平の夢まどかなる古浄瑠璃や、手品からくり、歌舞伎小屋の立ちならぶ、道頓堀のまつ唯中から物凄いな響きを立てた。

思へば星霜十餘年、天王寺村の小百姓が、華々しくも藝壇へ乗り出して、浄瑠璃革命の烽火を揚げようとは。彼漸くに三十五歳。

新派浄瑠璃の發表と同時に、尾崎權右衛門、竹屋庄兵衛との同盟はいよいよ鞏固にかためられ義兄弟といふことになった。理太夫も、もう理太夫ではいけない、竹本義太夫と改めた。竹本は盟主竹屋の一字を取つたもの、義太夫は義を重んずるといふ信念から。かうなると三昧線

の尾崎權右衛門も、竹屋の竹と淨瑠璃三味線の始祖澤住檢校の澤の一字を取つて、竹澤、名はそのまゝの權右衛門、これが現今に至るまで義太夫三味線の開祖として尊崇的となつた人である。由來三味線の名稱に、豐澤、野澤、花澤、鶴澤などこゝに因を發してゐるわけである。

權右衛門は泉州尾崎の産れ、温厚篤實の人、義太夫と結んで三十餘年、終始彼れを助け、義太夫歿後は、斷然舞臺を退いて餘生を門弟の教養に努めたといふ義理堅い人である。大正十五年末流數百の三味線彈きが心を一つにして追慕の巨碑を四天王寺に建てた、碑文は囑によつて著者が書いた。

竹屋庄兵衛又興行界の傑物、始め宇治加賀的一座に資を下ろしてゐたが、義太夫の將來を見込んで、遂に彼れを大成せしめた。

かうした三偉人の同盟によつて、新派義太夫節なる大旗は、道頓堀西の芝居（現今浪花座の在る處）に勇ましく翻へつた。

先づ劇場の表屋根に上げた櫓には、義太夫自家の定紋、鞠ばさみに九枚笹を描いた幔幕をめぐらし、櫓の下には長方形の大看板に、「太夫、竹本義太夫」の七字を墨痕あざやかに大書して座長の責任を明らかにし、こゝに即ち「櫓下」なる名稱の嚴肅なる意義を確立したのであつ

た。(もつとも此櫓下の法式は元和の頃、薩摩淨雲がまだ江戸へ下らず次郎右衛門と號して浪花の地にあつた時、始めて出來た一の形式ではあるが、義太夫に依つて眞の意義が確立したわけである)

さて義太夫節の旗標を掲げて、第一彈を放つた晴れの興行には如何なる狂言が選定せられたか、近松門左衛門作「世繼曾我」がそれである。義太夫曾て加賀掾座にある時、近松とも親しくして、將來を期してゐたから、かういふ狂言が手に入つたものであらう。「世繼曾我」はもと宇治座の爲めに書いたもので、作者もまた得意の作であり、且つは曾我兄弟歿後、虎御前の腹に産れた祐成の一子を以て、曾我家再興となる筋だから、今度の旗上げの吉例を祝ふの意味を含んでゐること勿論である。

義太夫は、「世繼曾我」五段續きに、序、二、三、四、五の大詰に至るまで切場は全部自分で語つてゐる、さうして櫓下なる名稱の責任を如實に果さうとして定規を立てた。その他の端場は、それぞれ弟子達に受け持たせることにしてゐる。弟子達にも陸奥茂太夫の老巧を筆頭に、美音で鳴らした竹本頼母、學匠で聞えた有隣軒大和掾の父内匠理太夫、其他竹本難波、竹本喜世太夫などの腕揃ひで、三味線には權右衛門の外に、藤四郎、三二(後に鶴澤の元祖友二郎)

の名手がゐる。人形には、後世おやま人形の開山と呼ばれる辰松八郎兵衛が、やうやく腕を磨きつゝあるころであつた。

古きに倦いて新らしい物に嚮ふ見物心理は今も昔もかはらないで、大衆は自分等の前に與へられたこの珍らしい新淨瑠璃の出現に雀躍して、翕然として集まり、開場の蓋をあけるや否や、潮の如く殺到して、市中の人氣は素晴らしいものだつた。

その頃市中を歩く下女や小者、まだ探りを見たことのない連中、はては橋の袂の乞食までが、かう一口淨瑠璃に唸つて歩いた。

げに享けがたき人の體をうけながら例少なき川竹の、流れの身こそ定かならぬ……
さりとしては戀は曲者みな人の、迷ひの淵やきのどくの、山より落つる流れの身……

世繼曾我、第二段化粧坂の冒頭の文、また第三段虎少將道行のくだりが、こんな風に次第次第に擴まつて行つた。先づ義太夫座出發の第一歩は、かうして興行的には幸先よく、進んでゐるのであるが、新淨瑠璃を標榜して、自己の新らしい藝術境を拓かうとした義太夫の志とは、相反する方へ見物側の賞讃は趨つて行つたのである。古淨瑠璃の特色である景事、節事の一節がかうして一般的に喜ばれることは決して義太夫の喜びとするところではない、義太夫はさら

にさらに精進一番せねばならなかつた。その四月には續いて宇治の古淨瑠璃で近松の推定作である「藍染川」を上演したが、その道行の文句

墨と硯の戀中を、誰^誰がさして淺みどり……………

と、梅の名寄せの曲節が、又もや市中の人達の口々に流布された。

なほ七月にも續いて宇治の古淨瑠璃「いろは物語」を出し、「一心五戒魂」をも上演した。かういふ風にだんだん興行は續けてゐるが、義太夫の本領は後年、自身の爲めに初めて近松が作をした「出世景清」や、さらに新しい試みとして社會戯曲「曾根崎心中」が書かれるに及んで、初めて多年の苦心と共に世の中へ現はれたのであるから、先づ義太夫座としては試練時代とも云へる。

此年五月十九日、井上流の祖、井上播磨掾が死んだ（異説あり）。かくて我古淨瑠璃の二大巨頭の一つは缺けて、残るは京都の宇治加賀掾ばかりとなつた。

義太夫旗上げの報は、日ならず京都の宇治加賀掾の耳を驚かした。かつては我が門弟であつてまだ嘴の青い若輩者の理太夫が、僭上至極にも、井上流でも宇治流でもない當流と稱する旗標を上げて、わが古淨瑠璃に對して反旗を翻へす不敵の振舞ひ、而かも道頓堀のまつたゞ中に

櫓を上げたその増上慢の鼻つ柱がありありと加賀掾の目にうつると、驚きよりも、一種名狀の出来ぬ、不快の思ひに胸を悪くした。實際のところ、その頃の加賀掾は、氣は若いが寄る年波には偽られず、自身の技藝の日に日に衰へて行くさまを自分自身ありありと知つてゐたので、心は焦燥つてゐるものゝ、それはどうすることも出来ぬ自然の理であつたけれども、氣の短くなつてゐる加賀掾は、義太夫が人を憚らぬ今度の振舞ひを、どうしてもそのままに見過ごして置くわけに行かなかつた。で彼れは深く心に決して、老いたりと雖も宇治加賀掾何條彼れしきの青二才に後れを取る可きやといふ意氣込みで、遙々大阪出征を試み、道頓堀に櫓を並べて、いで一挫ぎに討ち平らげんと、こゝに二座對立の壯觀を呈することゝなつたのである。

時に貞享三年の春（異説、元年の九月とも）。

若い新進の義太夫と、古強者の加賀掾がこゝに端なくも戦端を開く事になつたのも、時勢の然らしむる處、亦止むを得ぬ成行であつた。

加賀掾一座が大阪乗込みの報を耳にした義太夫の驚きは、加賀掾の驚きとは又別なものがあつた。彼れは悲しみもし當惑もした。義を重んずる彼れとして、かりそめにも一旦は師と頼んだ加賀掾と、鎬を削つて争はねばならぬ今度の成行きを如何に嘆いたことか、しかし彼れは涙

を揮つて覺悟をした。いま若し心弱くも戦はずして師の軍門に降るとせば、曾ては神に誓つて大成を期してゐる、わが新興淨瑠璃を如何せん。藝術の前には最早何ものもない義太夫は堅く決心すると共に、片手では師を拜み片手には扇拍子をとつて、雄々しくも起ち上つた。日ならず、西の義太夫座に對して、東の芝居に宇治加賀掾の櫓が勇ましく上げられた。新舊兩派の興廢、かゝつて此一戦にありとばかり、道頓堀はなんとなく殺氣立つた。

兩軍の陣容如何。先づ加賀掾一派は義太夫が常に近松の作を上演するに對し、當時文壇の飛將軍として文名隆々たる井原西鶴の作「曆」を執つて火蓋を切らんとすれば、義太夫座はこれに酬ゆるに、近松門左衛門作るところの「賢女手習並に新曆」をもつてした。かくてこゝに端なくも、文壇の兩雄が各自兩派に己が作を提供して、偶然作者戦を演ずるの奇觀を呈せんとは。戦ひは正に白熱した。

西鶴の「曆」と云ひ、近松がこれに對して「新曆」と双方ともに曆を題材に取り入れてゐるのは、當時頻繁に行はれた曆の改廢といふ事實を脚色したものだと思はれる。我邦で久しく用ひてゐた貞觀三年以降の「宣明曆」を廢して、貞享元年四月「大統曆」を使用したのが、これも程なく同年十一月に至つて、どうも完全でないといふので、澁川春海の「貞享曆」が用ひられ

た。それが現今にまで及んでゐるのであるが、西鶴の「曆」とは想ふに「大統曆」を指しての命題ではあるまいか。また近松の「新曆」とは時にたまたま再改正になつた「貞享曆」を當て込んで、遽かに加賀の座の曆に對して、新曆と押つ冠せたのに相違なく、藝題の上にも、既に新らしさをひらめかした新進義太夫座の意氣、見るが如くに彷彿する。

さて、兩座の勝敗如何。哀れや加賀掾座は不評判不入り、さんさんの敗北で、中途閉場の止むなきに立ち至つた。これに反して、義太夫座はみごと敵軍を屠つて、なほ餘裕綽々たるの概があつた。

無念の齒齧みをなした老骨加賀掾は、大童となつて、再度陣容を立て直し、今度こそは目に物見せんと誓を鳴らして立向つた。さうして狂言も再度西鶴の作「凱陣八嶋」をもつて對したが、此興行は背水の陣を布いて死物狂ひに戰つた故か、或はこの「凱陣八嶋」の花々しい脚色と、滑稽味などの豊富なところが喜ばれたものか、前回とは打つてかはつた好人氣で、やつと面目を恢復した。かうして愁眉を開くまもなく、悲運は何處までも悲運で、天この老藝術家に幸ひせず、或夜突然に劇場内から火を發して、劇場はもとより、人形、衣裳、諸道具に至るまで、すべて一塊の焦土と化せしめた。加賀掾の悲痛落膽、思ひ遣るだに哀れの極みである。さ

すがの老将、もはや張りつめた我慢も挫け、無限の恨みを呑んで京都をさしてすどすどと引上げて行つた。

宇治はその後再び大阪へは下つて來なかつた。

苦節苦戦の十九年

缺損つゞきの興行難

旗上げ興行の後二年、義太夫節に、はじめて新興淨瑠璃の意義が見え出して來た。即ち貞享三年二月、近松門左衛門は遂に義太夫の爲めに、特に義太夫の長所を發揮せしむべき恰好の作をもたらししたのである。それは『出世景清』と題するものであつた。そも義太夫が近松と相識る仲となつたのは、義太夫が曾つて京の宇治座に在るの時、お互ひに新しい藝術に志すものとして、或は將來を語り、提携の約を結んで置いたものであつたらう、義太夫第一回の旗上げに當然新作を上演す可き筈を、近松は大いに自重して、先づ舊作中の好評ものであつた『世繼曾